

## 安部公房の小説『けものたちは故郷をめざす』 : カ フカ文学との対比

有村, 隆広  
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5477>

---

出版情報 : 言語文化論究. 10, pp.119-132, 1999-03-01. 九州大学言語文化部  
バージョン :  
権利関係 :



## 安部公房の小説『けものたちは故郷をめざす』

—カフカ文学との対比—

有 村 隆 広

### はじめに

『けものたちは故郷をめざす』は、ドキュメントふうの小説である。主人公の19歳の少年九木久三は1945年（昭和20）夏、日本の敗戦により現中国東北部（旧満州）に一人取り残される。本小説は彼が日本の港に辿り着くまでの苦闘の記録である。

本論では、先ず第一に、主人公の行動の軌跡とその特徴を明らかにする。第二に、主人公が渴望した故郷の概念を分析し、第三に安部のこれまでの作品と本小説との類似点と違いを論じる。第四に、第三番目との関連で、安部文学とこれまで彼が影響を受けたドイツ文学・思想とのかかわりを分析する。

『けものたちは故郷をめざす』は、1957年（昭和32）、群像1—4月号に連載された小説であるが、彼はそれ以前に以下の作品を書いている。安部の最初の小説は、1948年（昭和23）に書かれた『終わりし道の標べに』<sup>1)</sup>である。同じ、1948年の6月『異端者の告発』<sup>2)</sup>、7月『名もなき夜のために』<sup>3)</sup>を執筆している。1949年（昭和24）には、安部文学の第一の転換期となった『デンドロカカリヤ』<sup>4)</sup>を「表現」に発表している。1950年（昭和25）、三つの寓話『赤い繭』、『洪水』、『魔法のチヨーク』を『人間』12月号に執筆している。<sup>5)</sup> 1951年（昭和26）、27歳のとき、『近代文学』2月号に『壁—S・カルマ氏の犯罪』を発表し、同年、5月、最初の作品集『壁』を月曜書房から刊行する。<sup>6)</sup>

1952年（昭和27）、この頃より記録文学への志向を強め、島尾敏雄、真鍋呉夫等と、「現在の会」を結成する。この時期から、安部は、その作風に広がりを見せ始めている。つまり、ドキュメンタリズムを応用する小説へと関心を向けている。『飢餓同盟』、『死んだ娘が歌った』1954年（昭和29）、『鏡と呼子』、『石の眼』1960年（昭和35）、そして本論で取り上げる『けものたちは故郷をめざす』がそれに相当する。

従って、安部の作風は、昭和20年代の後半から二つに大別されている。その第一は、「現代寓話とも言うべき」中短篇小説群<sup>7)</sup>、すなわち、ヨーロッパの文学・思想の影響を直接に受けた作品群である。これらには、初期詩集の『無名詩集』、『終わりし道の標べに』、『異端者の告発』、『名もなき夜のために』、『デンドロカカリヤ』、『壁』三部作等があるが、これらは、『R62号の発明』、長編『第四間氷期』を経由して『砂の女』にいたる。

その第二の流れの一つが本論で論じる小説、『けものたちは故郷をめざす』であり、この小説は、一種のドキュメントふうの小説、いわば記録文学の性質を有している。安部は、エッセイ「記録と写実」のなかで、記録、ドキュメントと写実との違いについて次のよう

な注目すべきことを述べている。

たとえば、記録と写実の混同である。私のように、いわゆるリアリズムとはちがった、前衛派の人間が、記録などと言いだすのはおかしいと思う人がいるかもしれないが、そういう人は、やはり記録を写実ととりちがえているのである。写実というのは、一見現実をじかに問題にしているようにみえながら、じつは現実という概念にしばられていることが多い。(全集7巻 139頁)

安部の上述の発言によると、写実は事物の本質を現していないということになる。そして、その現実を正確に表すには、記録が必要になると、説明する。

記録精神というのは、(・・・)新しい現実認識なのである。一見無意味な、偶発的ともみえるものから、積極的なリアリティをつかみだそうとする立場なのである。いかに異常事態をとらえたルポルタージュであっても、作者が事前に用意した現実解釈によって整理されてしまったようなものは、意識をふみ破って人間内部にふみこんだシュールリアリズムよりも、まだ記録性にとほしいものといわなければならない。記録精神は、単に記録映画や記録文学にとつてだけでなく、虚構をもふくめた全芸術分野において、荒々しい今日の現実をとらえる方法として、積極的にとりあげられる必要があると思うわけである。(全集7巻、140頁)

安部は「記録精神」は、純文学作品にとつても必要であると、断言している。『けものたちは故郷をめざす』は、安部のこのような決意のもとに執筆されている。

## 第一章 小説『けものたちは故郷をめざす』の特色

### 1) 極限状況の世界

小説は、次の書き出しで始まっている。これまでの安部の他の作品に比べると非常に読みやすく、またわかりやすい。一種の冒険物語の色彩も帯びている。

「いよいよ明日に決まったぜ、南行きの列車がでるんだそうだ。」といてくるなり、熊中尉が言った。外套の肩にはりついてた雪の結晶が、ちじんで水滴にかわる。

「明日だって？」アレクサンドロフ中尉はかがみこんでいたスープ皿から半分だけ顔をあげて、疑わしげに相手をみた。「じゃあ、十二号鉄橋地区の国府軍は、どうなった？」「消えちゃったらしいね。」「消えた?」「逃亡したんだろうと思うな……それで、明朝九時に出発ときまったわけだ。」

(それじゃ、おれの脱出も、とうとう今夜に決まったな。) — とストーブの灰をかきまぜながら九木久三は思った。(全集6巻 302頁)

『けものたちは故郷をめざす』の主人公、九木久三は、日本の敗戦後も中国東北部(旧満州)に留まり、占領軍であるソ連軍の宿舎で、雑役をするボーイをしながら2年半暮らし

ているが、いつも故国、日本に帰るチャンスをうかがっている。そのような時に、彼は前述のロシア兵たちの話を立ち聞きする。

日本の敗戦まで彼は、父の死後、寮母をしている母とある工場の寮に住んでいたが、母との生活が急変したのは、1945年8月9日、九木が16歳の時であった。その日の午後、見なれない蚊のような黒い飛行機が南へと飛んでいった。ソ連の参戦であった。その日の夕刻、関東軍（旧満州に配置されていた日本の軍隊）が、東の方へ移動していった。それから数日して、街はソ連軍に占領され、九木の母親は流れ弾に当たって死に、彼は天涯孤独の身になった。

母親を凍てついた氷の墓場に埋葬した後、久三はあわてて寮に駆けもどると、リュックにつまるだけの荷物をつめて、外に飛び出し、日本人をさがして町中を歩いた。半日走りまわったが、865人の日本人はどこに行ったのか、すっかり消えてしまっていた。まるで「干潟の後の溜り」のように、彼だけが取り残されていた。

九木久三が住んでいた町の日本人たちは、すべて避難したか、あるいは殺され、彼は、彼を庇護してくれるはずの母親に死なれ、恐怖と疲労に打ちのめされた。その時の状況を作者の安部は次のように書いている。

翌日、戦争がおわったことをロシア兵におしえられた。彼らは熱狂し、一晩じゅう歌いあかした。むろん、なぐり合いもすこしはあった。しかし久三の身にはべつに何も変わったことはおきなかった。そのころ、何十万という僻地の日本人が、死と手を握り合いながら、なだれをうって南の都市に絶望的な行進を開始していたのである。しかしここにはその絶望さえない、静かな台風の眼であった。もっともそれから二年と七カ月後には、その凄惨な嵐のあとを、そしてまたひとしお激しい嵐のなかを、彼自身通りぬけねばならなかったのではあるが……（全集6巻 324頁）

## 2) 極限状況からの脱出の試み

主人公の九木久三は、母の死後も、接収された寮で占領軍のロシア兵達とともに住んでいる。南行きの列車が出ることをしらせた将校の熊中尉、アレクサンドロフ中尉、戦慄少尉、そして女医のダーニヤ等との共同生活である。南行きの列車とは、彼にとってはとりもなおさず日本への道、すなわち故郷への道を意味する。九木久三は、これら将校たちが酔い潰れた後、食料、寝具、地図等を用意し、兵営を抜け出し、南行きの列車が発する駅に向かい、貨車のなかに身を潜める。すると、しばらくして貨車の扉が引き開けられ、彼はアレクサンドロフ中尉に発見され、駅長室に連れていかれる。中尉は、穏やかな口調で、「おれたちと一緒にいるのが、いやなのかね？」と尋ねる。アレクサンドロフ中尉は、駅長に数枚の紙幣を払い、九木の為に「特別旅行者証明書」を発行してくれた。そのうえ、中尉は別れる際に、1センチほどの厚さのある軍票（戦地で使用する一種の紙幣）の束を取り出して、九木のポケットに押し込む。

このソ連の将校は、無断で逃げ出した九木を逮捕するどころか、特別証明書、おまけにお金まで与えて九木を許し、故国日本への帰国を助けようとする。

### 3) 氷と雪の荒野を南へ向かう

やっとのことで、九木は合法的に列車に乗り込む。そしてそこで王木枕という正体のわからない中国人と知り合いになり、お互いに共通の運命を感じる。南行きの列車は敵の待ち伏せに合い、爆破される。九木はその中国人と零下30度から40度の酷寒の原野を南へと、逃避行を続ける。その謎の中国人は、母親が日本人で、その母親の父は朝鮮人ということであった。その男は、ぼんやり半ば自分に言い聞かせる調子で次のように語る。

「内地に帰れたら、うれしいかね？」

「(・・・) そりゃ、うれしいです。」

「そうだろうな(・・・) おれはまったく、いろいろ考えたりするのが好きなたちでね、おれはいったい何処からやってきたのかな？ そんなことをつい考えちゃうんだ。おかしなものだよ。それで、そのせいか、おれには信念みたいなものがあるらしいんだな… (全集6巻 348頁)

その男の名前は高石塔と叫ぶ。この高という男も九木と同じように、故郷を求めて日本への脱出を試みる人であった。いわば九木と同じ精神系譜に属する人といえる。石ころ、溝、氷、枯草のなかを、地平線の彼方へと二人の男は、南へとよろめきながら歩き続ける。絶望的なさすらいのなかで、九木は次のように考える。

(あたかも火がもえていて、なにかんがえずに眠られる寝室があり、家の外は庭、庭の外は道、そしてそれ以外にはなにもなく、安全で平和でこんな死にたえた荒野のことなどはただの笑い話になってしまうような、おかしいことがあれば笑い、退屈すれば椅子の背で静かに目をつぶり、すべての行為に意味があることを知っている、男や女や子供たちのすんでいる町……) (全集6巻 352頁)

南への苦しい旅を続けながら、九木はまだ見ぬ日本のことを「誰でもが普通に住める所」と空想する。そのような絶望的なさすらいのなかで、九木の心は錯乱する。寒さと飢えのなかで、九木と高は、一匹の飢えたよろよろの痩せた犬を見つける。二人は本能的にその犬を捕まえ、肉を食べようとする。犬もまたこの痩せこけた二人の人間を餌にしようとして彼らの周囲をうろつく。二人と一匹の鬼ごっこが始まる。しかし、犬は意識朦朧となった二人の人間に興味をなくし、尾をまげて、ひょろひょろと東の荒野のなかに消えてゆく。

疲れはてて寝込んでしまった二人の前に馬車が現れる。彼らはお金を払ってその馬車で近くの集落まで運ばれる。夜になって、二人はある集落の廃屋のなかで目をさます。その集落で仲間の高は、そこを占領していた軍隊の将校に頼み込み、二人は南へ退却する軍用トラックに便乗する。

### 4) 瀋陽への到着 ー日本への接近

瀋陽(現中国東北部の都市)に到着し、そこで九木は、高と別れ、高の指示で公園の噴水のなかの隠れ穴にしばらく潜む。今や異国となったその大都市の有様を作者の安部は次

のように描写している。

しかし都会の一部だった。道はアスファルトで舗装されていた。日曜日の朝のように、すべてが新鮮な光で輝いてみえる。固くひびく靴音は、自然を追いはらった人間の力を誇示しているようだ。久三は自分が人間であることを、心から誇らしく思ったものだった。ガードをくぐって市街地に入ると、希望とよろこびはいっそう激しく沸騰した。この素晴らしさを人々とわかたためにも、早く日本に帰りたい(・・・)しかし、いますぐ話しかける相手がいないということは、孤独な哀しさをさそいもした。(全集6巻 413頁)

高と二人で雪、氷、枯れた草原を長い間、飢えと寒さに震えながらさすらって来た九木にとっては、この大都市は天国のように見えた。しかし、同時に日本が負けた今となつては、その都市は彼にとっては異邦人の街であり、また彼の生命を脅かす所でもあった。

九木は公園で犬殺しの少年と知り合い、その少年は彼を日本人達が住む場所へと案内する。日本人たちは有刺鉄線にかこまれた昔の社宅ふうの一面に隔離されて住んでいた。しかし彼は証明書がないという理由でその中に入れてもらえなかった。九木はまたもや人間社会、そして今回は同じ日本人から突き離される。

日暮がちかい(・・・)どこに行けばいいのだろうか？完全に捨て去られてしまった(・・・)ちょうど、遅刻して教室に入れない中学生のような、心細い気持ちだった。しかも、家はどこにでもあった。家があればかならずドアがあり、ドアがあればかならずしっかりと錠がかかっている。ドアはすぐそこにあったが、その内部は無限に遠いのだ。けっきょく、あの人つ子ひとりいない荒野と、すこしも変りはしないじゃないか・・・(全集6巻 428頁)

荒野のなかでも、そして街のなかでも主人公の九木久三は孤独であり、その境遇は益々悪くなってゆく。作者の安部は上記の引用とほぼ同じ内容の文を短篇『赤い繭』のなかでも書いているが、上記の引用文はまさしく若い頃の安部の気持ちを表している。

主人公の九木はこれまで酷寒の荒野をともに歩いてきた高にも裏切られたことを感じる。絶望にうちひしがれて歩いていると、九木は日本人の大兼保雄に出会う。彼は、密貿易のブローカーである。彼はその男に拾われ、日本との間を行き来する密貿易船で働くことになる。船のなかで、彼は瀋陽の街で彼を置き去りにした高に再会する。船は日本の港に入港したが、密貿易の秘密を知ってしまった九木は上陸を許されず、船底の狭い船室に閉じこめられてしまう。

(・・・)ちくしょう、まるで同じところを、ぐるぐるまわっているみたいだな(・・・)いくら行っても、一步も荒野から抜けだせない(・・・)もしかすると、日本だってどこにもないのかもしれないな(・・・)おれが歩くと、荒野も一緒に歩きだす。日本はどんどん逃げていってしまうのだ(・・・)一瞬、火花のような夢をみた。ずっと幼いころの巴合林の夢だった。高い塀の向こうで、母親が洗濯をしている。彼はそのそばに

しゃがんで、タライのあぶくを、次々と指でつぶして遊んでいるのだった。つぶしても、つぶしても、無数の空と太陽が、金色に輝きながらくるくるまわっている。そしてその光景を、塀ごしに、もう一人の疲れはてた彼が、おずおずとのぞきこんでいるのだ。どうしてもその塀をこえることができないまま（・・・）こうしておれは一生、塀の外ばかりをうろついていなければならないのだろうか？（全集6巻 451頁）

主人公の九木久三は密輸船に乗り、日本の港までは帰ってくる。しかし船側の鉄板一枚に隔てられて、夢にまでみた日本に上陸することができない。

このように『けものたちは故郷をめざす』は、敗戦後の旧中国東北部で肉親をなくし、国家の庇護を失った少年が故国日本へ帰国しようとして、その直前になって上陸を拒否された苦難の物語である。

## 第二章 故郷という概念について

この小説は作家安部公房の伝記的要素を色濃く反映している。戦争が終わった時、安部は21歳で、開業医をしている父親の仕事を手伝っていた。同じ年の8月、発疹チフスが流行し、その診療にあたっていた父が感染して死亡した。昭和21年、占領軍から家を追われ、奉天市内を転々とし、サイダーを製造して生活していた。年の暮れ、引揚船（敗戦後、外地の日本人達を内地に輸送した船）に乗船したが、日本本土に上陸直前コレラが発生し、佐世保港の近くで十日近くも上陸を許されなかった。乗客（引揚者）のなかには、発狂するものまでいた。<sup>9)</sup>

このときの体験が『けものたちは故郷をめざす』の随所にあらわれている。作者の安部は無事日本に帰国したが、作品のなかの主人公の九木久三は、帰国することができない。この点において、モデルと小説は異なっている。

安部は満州（現中国東北部）での生活を振り返り、「奉天一あの山あの川」のなかで次のように述べている。奉天は現中国東北部の瀋陽のことである。

私が育った奉天というところは、あの殺風景な満州の中でもとくに殺風景な町である。（・・・）それでも、その殺風景さにかえて心ひかれるとしたら、それはやはり故郷であるためだろうか。たしかに、故郷に準ずる町ではある。しかし、故郷であると断言できないのはなぜだろう。私の父は個人的には平和な市民であった。しかし日本人の全体は武装した侵略移民だった。たぶん、そのせいで、私たちは奉天を故郷と名乗る資格をもたないのだ。

そうかといって、ほかに故郷と呼ぶ場所もない。奉天にいるときは日本の夢を見、日本に帰ってきてからは奉天の夢を見る。私はときどき自分が故郷の周辺をさまよいながらついに中に入れないうアジアの亡霊であるかのような気持になってくるのだ。「鎖を解いたアジア」という言葉に、センリツに似たよろこびをかんじるのも、そのためであろうか。（全集4巻 484頁）

つまり安部は本当の意味での故郷は彼にはないと述べ、さらに彼は故郷という概念につ

いて次のように具体的に語っている。

ぼくは東京で生まれ、旧満州で育った。しかし原籍は北海道であり、そこでも数年の生活経験をもっている。つまり、出生地、出身地、原籍の三つが、それぞれちがっているわけだ。おかげで略歴の書き出しがたいそうむつかしい。ただ本質的に、故郷を持たない人間だということは言えると思う。ぼくの感情の底に流れている、一種の故郷憎悪も、あんがいこうした背景によっているのかもしれない。定着を価値づける、あらゆるものが、ぼくを傷つける。<sup>10)</sup>

一種の故郷憎悪は、故郷にたいする憧れの逆の現象であるとみなしてよいが、安部には定着を価値付けるものに対する不信の念があったことも事実であり、このことが安部文学の根底にある。安部はいわゆる他の日本人のような意味での故郷を持たない。つまり自分の生存の外的な基盤というのを持たない。根なし草というやりきれない気持ちを終生有していた。したがって、『けものたちは故郷をめざす』の主人公にも、そしてもう一人の登場人物の高にもふるさとを与えていない。つまり彼らは下の引用のなかでも述べられているように「境界線上」の人物である。

「九木久三」の行きついた帰結がこの「境界線上」の発見である。さらにここには、安部公房の主題の帰結がある。「現代」には、「安定した空間」などはどこにもなく、あらゆる場所が「境界線上にある。「罨からのがれようとすること自体が、罨にかかることなのだ。」というぬぐい難い難い観念がここにおいて明確に定着するのである。<sup>11)</sup>

つまり、安部公房は、この『けものたちは故郷をめざす』において、現実世界との関連のなかで、二十世紀の人間にとっては、いかなる意味においても安住の地はないこと、すなわち「安定した空間」としての故郷は存在しえないことを明らかにしている。

### 第三章 これまでの小説との関連

「はじめに」のところでも述べたように、安部のこれまでの主要作品は、『終わりし道の標べに』、『異端者の告発』、『名もなき夜のために』、『デンドロカカリヤ』、『壁—S・カルマ氏の犯罪』である。これらは、一般的にいえば、アレゴリー風の作品であるが、これらの小説のなかで、最初に書かれた『終わりし道の標べに』はどちらかというところドキュメント風な小説である。すなわち現実の社会の出来事をその小説の背景にしている。

小説の舞台も現中国東北部（旧満州）である。十年前、主人公の「私」は、国家も恋人も、故郷も捨てて、逃走の旅を始める。『けものたちは故郷をめざす』の同伴者であった高と同じく、主人公の「私」の仲間も高と言う名前である。逃走の旅のなかで出会う人々も、『けものたちは故郷をめざす』の場合と同じく、旧満州のゲリラ達である。彼らが活躍する舞台も、第二次世界大戦後の混沌とした現中国東北部である。

ただし、『終わりし道の標べに』の主人公は、九木久三のように故郷を求めることはしない、いなむしろその故郷から、つまり、故郷のイメージから逃走する。

『終わりし道の標べに』の冒頭部分は、「終わった所から始めた旅に、終わりはない。墓の中の誕生のことを語らねばならぬ。何故に人間はかく在らねばならぬのか？」の問いに始まっている。そして、小説は、「私はあらゆる故郷、あらゆる神々の地の、対極にたどりついたのだ」という文章で、終わっている。つまり、故郷から逃走しても、新しいユートピアに到着することはできないこと、そしてそのような行動は破滅をもたらすだけであることを、主人公の「私」は最終的に納得する。その場合のストーリーの展開は『けものたちは故郷をめざす』と比較して観念的であり、かつ、現実性に欠けている。

主人公は、喪失した故郷をハイデッガーの「存在と時間」<sup>12)</sup>のなかにてでくる用語、「用材性」を用いて説明している。日本の敗戦を知らされた後、主人公の「私」は、神の存在を否定するが、その否定の仕方を、ニーチェの著書『たのしい知識』<sup>13)</sup>から取り入れている。また、主人公は自分自身のこのような心の動きを逐一記録し、自分の置かれた精神状態を把握しようとする。つまり「書く」ことによって自分の人生を知ること、このような生き方を、リルケの『マルテの手記』から学んでいる。小説を書くというよりは、その当時安部が考えていたことを、彼がこれまで感銘を受けたハイデッガー、ニーチェ、リルケ等の思想の一端を利用しながら、ぶちまけたといえよう。したがって小説としては成功しているとはいえない。

『名もなき夜のために』では、主人公の「私」は、この世界でいかに生きていくかについて悩む。彼はリルケの『マルテの手記』を読み、人間の痛々しいまでの弱さを主人公のマルテのなかに見付け、それは彼自身にも当てはまることを痛感する。このことは、敗戦後の混沌とした日本の社会のなかでいかに生きるかを模索している作者安部自身の姿でもある。この小説は『けものたちは故郷をめざす』の主人公の外部世界との戦いとは異なり、主人公の内面的な苦悩を描いている。

『異端者の告発』では、ニーチェのいう「価値の転換」が主人公の「僕」の住む世界でもなされる。つまり日本の敗戦により、これまで善なるもの、真なるものとしてみなされていたものが価値なきものとして否定され、人々は心の支えを失ったが、『異端者の告発』の主人公もまさにこのような青年の一人である。彼もまた、現実の生活のなかでの日々の苦しみというより、心のなかでの苦悩を味わっているが、これも敗戦直後の作者安部の分身であるといえる。

『デンドロカカリヤ』は、人間のコモン君が植物になった話である。コモン君には友人もなければ、恋人もいないし、家族もない。『けものたちは故郷へ帰る』の九木久三とおなじように天涯孤独である。このようにコモン君は常に心に空虚を有していたがゆえに変身する。この『デンドロカカリヤ』のコモン君も、も青年時代の安部の自画像といえる。

『壁—S・カルマ氏の犯罪』は一種の変身譚である。主人公のカルマ氏は生身のカルマ氏と名刺のカルマ氏に分裂する。しかし、身体が変身するのではなく、主人公の「ぼく」が名前を失ってしまう。名前が彼の体からぬけだしていくという意味での変身である。身体と名前が分裂したので、もはやカルマ氏は生きてゆくことができない。それゆえに、壁に吸収されて、この世を去る。この作品も『デンドロカカリヤ』と同じくパラベルの手法で書かれている。

『終わりし道の標べに』は、その背景となる舞台は敗戦当時の旧満州であるので、その意味では現実の世界である。しかし、その物語手法はややもすると非現実的である。その次

の小説『名もなき夜のために』、それに続く『異端者の告発』になると非現実的な要素はさらに強まり、『デンドロカカリヤ』、『壁—S・カルマ氏の犯罪』になると完全にパラベールの手法で描かれるようになっていく。

そして、『けものたちは故郷をめざす』で、安部は再び写実的な手法に戻り、しかもそれは本論の第一章で述べたようにドキュメンタリズム、記録精神に満ちている。このドキュメンタリズム、すなわち記録文学の手法を用いることにより作者の安部は、その当時の彼の問題意識、すなわち故郷喪失と「境界線上の」人間像を、より適切に表現することができる考えたのである。

#### 第四章 ドイツの文学・思想との対比

安部は旧制高校に入学してから、数学に興味をもっていたが、父親が医者だったので、やむなく医学部に入学した。どうして文学をやり始めたかという、第二次世界大戦がその理由である、と述べている。

戦争中、ぼくは仕組みの裏を、いろいろ考えちゃったんですね。ほんとうのことを知りたいという気持ちが強いわけですよ。それで文学のほうではなくて、哲学のほうに向かっていったんです。戦争中のことです。読めるものはハイデggerとか、そういうものです。そこに一応逃避点を見つけて、サルトルなんか全然しらずに、実存主義という世界観で現実を何か書きたい気持ちがあったんですね。(全集4巻 350頁)

上述の引用は、「何を書きたいか—戦後作家の場合」という座談会での安部の発言であるが、このように彼はヨーロッパ文学・思想の影響をはっきりと認めている。

敗戦直後の中国東北部で、主人公の九木は母親をなくし、周囲の日本人達からも置き去りにされ、国家からの庇護もなくした。いわゆる、極限状況のなかに投げ出されている。このような状況を、作者の安部は次のように記述している。

昨日の中に今日があるように、今日のなかに昨日が生きている。そんなふうなのが人間の生活だと教えられ、彼もまたそれを信じてきた。しかし戦争の結果はそうした約束をばらばらな無関係なものに分解してしまったのだ。いまの久三にとって、昨日と明日は、もはやなんのつながりもないものになってしまった。(全集6巻 316頁)

つまり、九木久三は、現実の世界、すなわち、彼がこれまで慣れ親しんでいた世界が、根底から崩壊してしまったのを感じる。このような現実世界の崩壊は、単に『けものたちは故郷をめざす』だけでなく、20世紀初頭のヨーロッパの作家・思想家、ニーチェ、ホフマンスタール、リルケ、カフカ等にも見られる。

カフカは、1910年の日記のなかで、次のように述べている。

私達はこれまで私達の手で作ったもの、私達の眼に映じたもの、私達の耳にきこえたも

の、私達の足の踏んだものへと私達の全人格を振り向けていたが、私達は今、突然その反対の方向に、あたかも山中の風見鶏のように身を振り向ける。(・・・)とその男は今や私達民族の外側、私達人類の外側に立っている。彼はいつも飢える。(der Mensch steht nun einmal außerhalb unseres Volkes ,außerhalb unserer Menschheit,immerfort ist er ausgehungert,...) 彼は、瞬間を所有するに過ぎない。それは不断に連続する苦の瞬間である。それに続くやすらぎの瞬間はその兆しさえみせない。彼が不断に所有するものはただ一つ、すなわち苦悩である。彼はこの世界の何処にも、この苦悩を癒す薬になる第二のものを所有しない。<sup>14)</sup>

1910年といえば、カフカが27歳の頃である。この日記のなかに彼の作品のテーマの一端を見ることができる。いわゆる一見実在するがごとくみえる日常の存在圏からの脱出をカフカは、上記の日記のなかで述べている。つまり、人間は、忘我、放心、驚愕、驚嘆、倦怠によって一歩その外側に踏み出すと、虚無を体験する。人間はもはや従来の伝統的な価値を信頼することはできない。存在の統一は崩壊し、それに必然的にもなって生じた「あらゆるものの価値の転換」の転換がなされる。そして、それは人間の認識能力そのものに対する深い懐疑、絶望へとつながる。人間は、もはやこの世界の現象を論理的整合性で説明することはできない。このような考え方は、19世紀から20世紀にかけてのヨーロッパの思想の流れのなかから解釈することができる。つまり古典的存在論から非古典的存在論への転換を意味する。

カフカのこのような体験は、ニーチエの「神の死」の概念に源を発している。第三章の後半で述べたように安部はその初期の小説群のなかで、20世紀初頭のヨーロッパの文学に決定的影響を与えた思想家たちの考えを完全に理解し、かつそれを自分のものとしている。従って、『けものたちは故郷をめざす』の主人公、九木久三の苦悩は、単に外的社会的なものであるばかりでなく、当然のことながら人々の精神的空虚、虚無感へと移行していく。

『けものたちは故郷をめざす』は、カフカの場合とは、価値の転換という意味では同じでもその対象に違いがある。安部の場合は、社会的な意味での価値の転換である。主人公の九木久三が生活していた空間は、日本軍が支配していた旧満州であった。日本人は支配者であり、昔からそこに住んでいた人々は非支配者であった。支配者と非支配者との立場が逆転し、その社会的な影響を主人公の九木久三がもろに受け、彼の人生が狂いだしたのである。しかし、カフカにおいては、上述の1910年の日記が示すようにそれは第一義的には、精神の世界に属するものであった。

ところが、最終的には、両者は同じ立場に置かれる。それは、安部の場合、その主人公、九木久三の苦悩は、表面的には、社会的なものであったが、その奥には精神的のものが隠されているということである。他方、カフカの場合は、精神的なものの背後に、社会的なものが潜んでいたということである。

それについて、安部の場合から論じてみたい。この『けものたちは故郷をめざす』は、一見すると、単なるドキュメント風の、すなわち記録小説そのものであるように見える。しかし、作者安部のそれまでの創作活動の経緯を分析し、その関連のなかで本小説を解釈すると、その背後に一貫したテーマを見ることができる。それは、『けものたちは故郷をめ

『けものたちは故郷をめざす』の原型ともいえるべき安部の最初の小説、『終わりし道の標べに』のなかで示される。この小説は、日本の敗戦のため、精神的社会的な拠り所を失った青年の物語である。彼は故郷の幻をもとめて旧満州の荒野をさ迷う。作者の安部は、故郷という概念をハイデッガーの「存在と時間」のなかにてでくる用語「道具関連」を用いて説明している。そしてその際の主人公の絶望を、ニーチェの晩年の詩「猛禽の間で」にヒントを得て、表現している。生きる支えを失った青年の苦悩は、日本の敗戦で、国を失った『けものたちは故郷をめざす』の主人公九木の心と同一である。

他方、カフカについても日記のなかの「彼」は、単に精神的苦痛のためにだけ悩んでいるのではない。カフカがその生涯の殆どを過ごしたプラハの町は、激しい反ユダヤ主義のに曝されていた。ユダヤ人達はプラハの街を流れるモルダウ川を背にして、いつも死とむきあって生きていた。カフカもその恐怖をいつも感じていた。作品のなかでも、『審判』のヨーゼフ・Kは、無実の罰を着せられて、えたいの知れない裁判所の役人により断罪され、『城』の土地測量技師のKは、村での滞在を拒否される。『変身』のグレーゴル・ザムザは変身したがゆえに家族からのけ者にされ、死を迎える。このようにカフカの主人公達はすべて共同社会から追放される。

それぞれの歴史的背景、前提条件は異なるものの安部文学とカフカ文学の場合、非常に類似している面があることが実証された。それは、安部がカフカの影響を受けたという事実もあるが、それ以上に、両者の文学的資質が二十世紀という「神をなくした」不透明な時代のなかで、同質の反応を示したためであろう。

## おわりに

野間宏は安部文学について次のように述べている。

安倍公房が若いしなかったならば、ということをして、私は時々考えることがあるが、私はその時戦後の日本文学ははたして何処へ行つたろうかとその行方がわからなくなるのを感じるのである。実際安部公房という存在を失ったならば、日本の戦後の文学はたちまちたがをなくした木桶のように、ばらばらになりとけて四散してしまうように思える。<sup>15)</sup>

このことは、同じ敗戦の体験をしながら、その苦悩を世界文学の分野にまで広げていった安部に対する適切な批評であり、かつ称賛の言葉である。

第二次世界大戦前後から創作を始めた作家としては、安部公房の他に、『暗い絵』（昭和21年）を書いた野間宏、『桜島』（昭和21年）で、死に直面した兵士を描いた梅崎春生、『永遠なる序章』（昭和23年）の椎名麟三、中国の上海で敗戦を迎え、『蝮のすえ』（昭和22年）を書いた武田泰淳、『野火』（昭和23-24年）の大岡昇平、『夢のなかでの日常』で敗戦後の青年の虚無を描いた島尾敏雄等がいる。これらの作家たちの作品は、いずれも作者の体験に基づいた小説ではあったが、狭小な私小説ではなく、第二次世界大戦後の社会の混乱と矛盾を鋭く描いている。その意味では、個人を越えた普遍的な人間像をテーマとしていた。しかし、それらのなかで、安部公房は、第二次世界大戦後の混沌とした世相を、単にその時代特有の現象であるとは考えず、二十世紀の文芸思潮の一環としてとらえていた。つまり、二十世紀初頭のドイツ・ヨーロッパの言語危機、神の死、実存主義の

出現等と、世界文学の流れのなかで、彼は文学の在り方を模索していた。野間宏の安部に対する称賛の言葉はまさに、このことを意味している、と考えられる。

## 註

- 1) 拙稿 「安部公房の初期の作品(3)『終わりし道の標べに』」  
言語文化論究 7、(九大言語文化部) 1996年
- 2) 拙稿 安部公房の初期の作品(2)『異端者の告発』  
言語文化論究 6、1995年
- 3) 拙稿 安部公房の初期の作品(1)『名もなき夜のために』  
言語文化論究 5、1994年
- 4) 拙稿 「安部文学の転機—カフカとの対比」  
言語文化論究 8、1997年
- 5) 拙稿 「安部公房の最初の作品集『壁』—フランツ・カフカとルイス・キャロルの影響」  
言語文化論究 9、1998年
- 6) 拙稿 同書
- 7) 『作家の世界—安部公房』 佐々木基一編 番町書房 昭和53年 283頁
- 8) 渡辺広士：『安部公房』 審美社 1976年 57頁
- 9) 「安部公房・年譜」『作家の世界—安部公房』 281頁
- 10) 『作家の世界—安部公房』 「安部公房を読む」(長田弘著より) 154頁
- 11) 栗坪良樹：「けものたちは故郷をめざす」—『国文学9月臨時号』、昭和47年5月号 48頁
- 12) Heidegger, Martin: „Sein und Zeit“, Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1979, S.68-69
- 13) Nietzsche, Friedrich: „Die fröhliche Wissenschaft“, KSA3, Deutscher Taschenbuch Verlag de Gruyter, 1988
- 14) Kafka, Franz: Tagebücher, S.20-21
- 15) 野間宏：(「安部公房の存在」—「新鋭文学叢書・安部公房集」付録 筑摩書房 昭和35年)『作家の世界—安部公房189頁』より引用

テキスト：1) 『安部公房全集 6』 新潮社 1998年  
2) 『安部公房全作品 1—15』 新潮社

## **ABE Kobos Erzählung „Die Bestien verlangen nach einer Heimat“ -im Vergleich mit der Literatur Kafkas**

**Takahiro ARIMURA**

ABE Kobo war zunächst erst durch die Gedichte Rilkes beeinflusst, dann durch den Existentialismus, besonders durch Heidegger, und durch die Dichtung Kafkas. Seine frühere Erzählung, „Das Verbrechen von S. Karuma“ stand deutlich unter dem Einfluß von Kafkas Roman „der Prozeß“. In der Erzählung „Die Bestien verlangen nach einer Heimat“ lassen sich jedoch keine direkten Einflüsse Kafkas mehr erkennen. In dieser Arbeit geht es daher in erster Linie um einen globalen Vergleich zwischen den Werken der beiden Schriftsteller.

Die Hauptfigur der Erzählung, „Die Bestien verlangen nach einer Heimat“, Hisazo Kyuki, lebt seit der Niederlage des Japans im Zweiten Weltkrieg als Diener in einer russischen Kaserne im Nordosten Chinas, denn seine Mutter starb während des Kriegs, und alle anderen Japaner waren getötet oder durch Hunger und Kälte umgekommen. Eines Tages flieht er aus der Kaserne, um in seine Heimat zurückzukehren. Nachdem er lange Zeit in der kalten Wüste Nordost- Chinas umherirrend zwischen Tod und Leben schwebte, erreicht er schließlich einen chinesischen Hafen und findet ein Schmugglerschiff, das nach Japan fahren soll.

Als das Schiff endlich in einem japanischen Hafen ankommt, wird er in eine Kajüte eingesperrt, weil er ein Geheimnis über das Schiff kennt. So kann Kyuki seine Heimat, in der er ein neues und ruhiges Leben verbringen wollte, letztlich doch nicht erreichen. Sein Versuch, der Grenzsituation zu entfliehen, scheitert.

Die Niederlage Japans veränderte Kyukis bisheriges Leben grundsätzlich und erschüttert damit auch seine Weltanschauung : Weil das Leben von heute die Folge von gestern ist, bemerkt man heute den Einfluß von gestern. Aber der Krieg hat alles vernichtet, man kann an nichts mehr glauben, und muß die Umwertung aller Werte erdulden.

Kafka schrieb einmal in sein Tagebuch: Waren wir bisher mit unserer ganzen Person auf die Arbeit unserer Hände, auf das Gesehene unserer Augen, auf das Gehörte unserer Füße gerichtet, so wenden wir uns plötzlich ganz ins Entgegengesetzte, wie eine Wetterfahne im Gebirge. [.....] Der Mann steht nun einmal außerhalb unserer Menschheit, immerfort ist er ausgehungert,.....

Die seelische Situation der beiden Schriftsteller ist in diesem Punkt sehr ähnlich, beide verzweifeln an einer Grenzsituation.

Es gibt aber verschiedene Phasen in bezug auf die Grenzsituationen. Sie stellt sich in dieser Erzählung im Bereich der wirklichen und dokumentarischen Welt dar, und zwar der Erfahrung des Zweiten Weltkriegs. Die Grenzsituation ist bei Kafka aber in der ersten Linie im Kontext der literarischen Entwicklung zu Beginn des 20. Jahrhunderts zu sehen. Zugleich gibt es auch Ähnlichkeiten zwischen den beiden Dichtern im Bereich der gesellschaftlichen und politischen Grenzsituation. In Kafkas Hauptfiguren spiegelt sich seine eigene Unterdrückung durch Tschechen und die in Prag lebenden Deutschen wieder. Ebenso wird Kyuki, die Hauptfigur der vorliegenden Erzählung, nach dem Krieg in China, in dieser ehemaligen japanischen Kolonie, als Fremder behandelt. In diesem Sinn sind also die soziale und die politische Umgebung der Hauptfiguren der beiden Schriftsteller vergleichbar.